

## 「大学体育」の未来を考える国際フォーラム

- I. はじめに
- II. 開催概要
- III. プログラム
- IV. 講演概要

特別講演 1 : Dr. Zhang Bing (清華大学教授)

「清華大学における体育教育」

特別講演 2 : Dr. Jackie Goodway (オハイオ州立大学准教授)

「将来に向かって：健康なライフスタイルの促進に資する体育プログラムの役割」

基調講演： 清水一彦先生 (人間総合科学研究科長)

「大学体育」の歴史と未来について

パネルディスカッション

ショートプレゼンテーション 1 : 鈴木守先生 (上智大学文学部教授)

「上智大学におけるカリキュラム改革について」

ショートプレゼンテーション 2 : 鈴木久雄先生 (岡山大学スポーツ教育センター教授)

「現代 GP の内容、成果、展望について」

ショートプレゼンテーション 3 : 緒方良先生 (日鐵商事株式会社名古屋支店副支店長)

「企業サイドからみた必要とされる人材」

ショートプレゼンテーション 4 : 鍋倉賢治先生 (筑波大学体育センター准教授)

「筑波大学体育センター開講科目「つくばマラソン」について」

質疑応答

### I. はじめに

「知の競争時代」を迎え、いま大学では自らの「教育力」が強く問われています。その「教育力」を高めるための様々な取り組みの中で「大学体育」はいかなる役割を果たすべきか、また変容する現代のニーズに対応するために「大学体育」で何を教えるべきかを検討する必要に迫られています。そこで筑波大学体育センターは、国内外における「大学体育」に関する先進的な取組事例を紹介しあい、「大学体育」の未来を考える国際フォーラムを開催致しました。

### II. 開催概要

- 主 催 : 国立大学法人筑波大学体育センター
- 日 時 : 平成21年3月6日 (金)  
10:00~19:00
- 会 場 : 筑波大学総合研究棟D1階  
「公開講義室」および大学会館1階「レストランプラザ」
- 参加人数 : 89名

### Ⅲ. プログラム

第1部： 招待講演 10:00 - 11:45

総合研究棟 D1階 公開講義室

開会の挨拶： 宮下 憲  
(筑波大学体育センター長)

来賓の挨拶： 工藤典雄  
(筑波大学副学長)

座 長： 松元 剛  
(筑波大学体育センター  
准教授)

10:15 - 11:00 Dr. Zhang Bing  
(清華大学体育教研部教授)

11:00 - 11:45 Dr. Jackie Goodway  
(オハイオ州立大学准教授)

第2部： パネルディスカッション

13:00 - 16:00

総合研究棟 D1階 公開講義室

基調講演： 清水一彦  
(筑波大学人間総合科学  
研究科長)

パネリスト：

鈴木 守 (上智大学文学部教授)

鈴木久雄 (岡山大学スポーツ教育セン  
ター教授)

緒方 良 (日鐵商事株式会社名古屋支  
店副支店長)

鍋倉賢治 (筑波大学体育センター准教授)

コーディネーター：高木英樹 (筑波大学体  
育センター准教授)

第3部： 情報交換会 17:00 - 19:00

筑波大学学生会館1階

「レストランプラザ」

開 場： 16:30

会 費： 5,000円

開会の挨拶： 遠藤卓郎 (筑波大学体育  
センター長補佐)

### Ⅳ. 講演概要

特別講演1

Dr. Zhang Bing (清華大学教授)

清華大学における体育教育

清華大学は、「人間本意であり、包括的な研究を構築し、かつ世界有数の開かれた大学であること」を使命として掲げ、「優れた人格、高いレベル、多様性を兼ね備えた創造性豊かな人材を育成すること」を目標としています。それらを踏まえた上で清華大学の体育の使命を申しますと、「スポーツによって人間教育を行うこと」にあります。全学生を対象とし、総合大学である清華大学の強みを活かした様々な教材を用いることによって、スポーツや運動、健康に関する知識の普及と発展とを同時に実践していきます。そのために、優秀な人材の投入戦略を敷いており、人間本意な採用、育成、雇用、情報のやり取りを同時に行っております。現状と致しましては、教授9名、准教授26名、講師20名、助手3名の計58名の教員と、飛び込みや陸上競技などの優秀な指導者が5名、国際審判員の資格を持つスタッフ3名が在籍しております。

清華大学において体育は、1年次から4年次までの4年間を通して必修となっております。中国国内で最多の52講座が開講されています。これらの講座を16,720名(458クラス)の学部生と、3,580名(90クラス)の大学院生が受講しています。科目としては、射撃、アーチェリー、フェンシング、飛び込み、ボート、ゴルフ、ローラースケート、競泳、ボウリング、ビリヤード、野球&ソフトボール、舞踊、陸上競技、サッカー、バスケットボール、バレーボール、卓球、バドミントン、テニス、体操、アクロバット体操、ボディビルディング、柔道、武術、

エアロビクスなどがあります。なお、これらの科目の実技指導に先駆け、スポーツ理論の授業を行います。

一般（学生）に対する体育の使命は、「国家のため、50年間健康に働くために運動をしよう！」というスローガンに基づく「国民健康計画」を遂行することです。学内の体育組織として、30の学生団体、14のスポーツチームがあり、それらのスポーツチームのために12名の常勤チューターがいます。その他数えきれないほど多くのスポーツチームや団体があります。競技会も多数開催されており、毎年少なくとも15の競技会や大会が開催されます。中でも、“John Ma杯”と呼ばれている競技会は特に盛大で、毎年40種目、40,000試合数を数えます。また、北京市では毎年6,000名程（マラソン：300名、ハーフマラソン：2,000名、他は10マイルや5マイル）が参加する北京国際マラソンが開催されます。全ての学生が、それらの競技会や大会に向けてのトレーニングを日々行っております。

競技スポーツに対する使命は、幅広い才能を備えた学生アスリートを養成する上で、「スポーツ教育の融合」、「文武両道」、「卓越性の追求」が原則となります。スポーツチームが35あり、学生アスリートが580名おります。最も競技力が高いAレベルには飛び込み、射撃、陸上競技、ボートなどが認定されており、次のBレベルにはバスケットボール、サッカー、バレーボール、競泳などが、Cレベルには卓球、野球&ソフトボール、チェス、自転車、カナスタ（トランプゲームの一種）、ロッククライミング、中国将棋、テニス、バドミントンなどがあります。各競技団体の目標は、レベル1の国際大会や国内主要大会、レベル2の国内主要大会や全国高校総体、レベル3の北京市高校総体に分けられています。清華大学での競技スポーツの実績ですが、

第29回北京オリンピック大会には、陸上競技に10名の選手が出場しました（100m、800m、1500mおよび4×100mR）。また、12年連続で北京市高校総体の優勝者を、8年連続で全国高校総体の優勝者を各々輩出しています。さらには、北京国際マラソン大会のアマチュアの部の優勝者も輩出し、ユニバシアード大会においても代表者は毎回好成績を取っています。

研究に関してですが、清華大学では、学校体育における主要な目的を達成するためにも、教科課程を強化するキーポイントに重点を置き、それが強みとなるような包括的なテーマを確立し、推進していくことを指導方針としています。清華大学における研究分野は、大学における体育教育の理論と実践に関する「学校体育」と、競技者のトレーニング理論と実践に関する「競技体育」と、国民の健康の維持増進に関する「一般体育」の主に3つに分かれています。博士課程には、体育教育コーチ科学のコースが、修士課程には体育教育コーチ学、身体運動学、運動コーチ学のコースがあります。研究拠点として、清華大学スポーツ健康科学研究センターと国家体育总局体育人文社会科学重点研究所が設立されています。これまでに、体育教育コーチ科学博士号取得者を1名、体育教育コーチ学修士号取得者を3名輩出し、さらに国家科学技術奨励賞銀賞受賞が1回、同銅賞受賞が2回、大臣賞受賞が3回という成果を挙げています。

清華大学の総合スポーツセンター内には総合体育館、屋外競技場があり、それぞれ38,775 m<sup>2</sup>、90,274 m<sup>2</sup>と非常に広く充実した設備を持っています。他にも、研究や測定を中心となる西体育館や競泳用の50mプールと飛び込み専用プールを有した屋内総合プールがあります。研究室には、身体組成測定、身体機能検査、血液検査、心理テストなど様々な測定に対応可能な各種

設備、装置が備え付けられています。なお、清華大学で開発した身体組成分析装置は、特許を取得しております。入退室管理も含め、測定データは全てコンピュータ処理されるため、測定結果はコンピュータに出力し確認することができます。また、それらのデータは蓄積され、それらを基に健康指導や運動指導、食生活指導が行われます。さらに、学内 Web を介してスタッフや学生が、専門家から評価や診断をもらったり、サポートセンターからアドバイスをもらったりすることができます。清華大学では、このように運動、栄養、心理、医療、生活習慣の各々に対して様々な支援をすることによって、スタッフや学生の健康の維持・増進をしていくシステムが構築されています。

#### 質疑応答

— 大熊廣明先生（筑波大学）

中国では、チェスや中国将棋、トランプゲームなどもスポーツとして捉えられていることは知っているのですが、それらは体育科教育として授業が成立しているのでしょうか。

> Dr. Zhang Bing

学生の要望数が一定数以上になれば開設されます。要望は Web からでも投稿できるようにになっています。

— 大森肇先生（筑波大学）

年間 4 万試合という、非常に多くの一般人向けの競技会が行われているのには驚きですが、全学の学生が多くの試合に出場するために日々準備をしているというのも素晴らしいことだと思います。どのようにそのような状況を作り上げてきたのでしょうか。

> Dr. Zhang Bing

練習や試合をする施設も充実しており、学内の様々な場所で運動する機会が持てます。また、競技施設だけでなく、体力測定や血液検査など様々な測定を行う施設も充実しています。

#### 特別講演 2

Dr. Jackie Goodway（オハイオ州立大学准教授）

将来に向かって：健康なライフスタイルの促進に資する体育プログラムの役割

#### 21 世紀における PE（体育）の役割

大学は大変重要な変化の局面を迎えており、予算の削減やプログラムの合理化など多くの試練に直面しています。多くの大学は、その使命や学生の教育成果に寄与するユニークな手法を用いた体育プログラムを求めています。体育の立場から、我々は優先順位を調査し、時代の変化に対応できるようにプログラムの改革を行う必要があるでしょう。

#### 体育における Health および Wellness ミッション

アメリカでは、以下のような流行病とも言える状況が多く見られます。

- 子供や成人の肥満の増加
- 全ての世代における身体活動量の減少（特に思春期から成人になるまで）
- 心臓病や糖尿病の増加
- 癌罹患率の増加

現在のアメリカ人は、史上初めて、彼らの親の世代よりも長く生きられるという保証がありません。これは、国家の公衆衛生上明らかに危機状態であり、身体活動レベルを増加させることがこの傾向を抑制する一つの方法として考えられます。

## 身体活動の利点

これまでの研究結果から、以下のような身体活動の利点が示唆されています。

- BMI、肥満、心臓病、血圧、糖尿病、癌、慢性疾患および行動障害の減少
- (健全な範囲内の) 体重、筋重量、心血管系の持久性、骨密度、精神的機能、QOL、健全な健康状態の増加

ただし、生涯にわたって身体活動を促進する PE プログラムが必要となります。

## 日本における体育プログラムの問題

日本でも慢性疾患罹患率が増加傾向にあるようです。今回、私たちがオハイオ州立大学 (OSU) で取り組み整理してきた公衆衛生および Wellness ミッションに関連した体育プログラムを共有したいと思います。私たちが、どのように生涯にわたる身体活動に焦点を当てていくようになったのかを知っていただき、そのプログラムからアイデアを構築してもらえたら幸いです。

## 改革の過程

OSU では、以下の 9 つの過程を経て体育プログラムが整理されてきました。

1. 全学生の把握
2. 本大学の背景
3. 構想および目標の設定
4. プログラム目標の概略
5. プログラム内容の選択
6. 指導者および支援
7. 品質管理の導入
8. 優秀者の認定
9. 評価および見直しと修正

これらの過程の一つ一つについて説明していきます。

### 1. 全学生の把握

まずは、新しい世代の特徴を把握することから始めました。不活動や肥満から過

密スケジュール、オンラインデマンドの普及など、10 項目の特徴が挙げられました。さらに、プログラムを組む上で特に考慮が必要と思われる学生の特徴や彼らの背景として、「学生の居住区に対するロケーションの利便性」、「コースの随時受け入れ体制」、「ヨガなどのヤングアダルトのための最新トレンドを反映させたコースの開設」、「卒業後も継続可能な生涯スポーツ活動」、「様々な技術発達レベルを認識し、生活上必要な技術および知識を教えるコース」、「科学技術に基づいた学習指導」、「成果および評価の明示」などが挙げられました。

### 2. 本大学の背景

OSU は、130 カ国から 44,000 名の学生と 10,000 名の院生が在籍する巨大な大学であります。体育は選択授業として開講されています。また、教育および人類生態学の単科大学として 5,200 名の学生と 190 の学科を有し、身体活動および教育サービスに関する学部には 1,000 名の学生と 35 の学科があります。私は、スポーツ、体育および運動科学の部局に所属しており、私たちが進めるプログラムは、スポーツ、フィットネスおよび健康プログラム (SFHP) と呼ばれています。

### 3. 構想および目標の設定

体育プログラムを変更する際に、どの要因が重要であるかを考えたところ、次のような要因が挙げられました。「特に教育環境におけるヤングアダルトの身体活動量を増加させることに関する健康事情や政策綱領」、「学生の健康状態を優先事項として認識し始めた大学の Wellness ミッション」、「身体活動の利点に関する調査・研究」、「体育専攻学生のからだの健康と要望に関するデータ」、「生涯に渡る身体活動パターンの

構築への焦点」です。

SFHP は、OSU の学生が活動的、健康的、壮健的かつ正しい知識を持った一つのコミュニティとしてより高い QOL を追求することを望んでいます。そして、学術的に正しいプログラムを提案するにあたって、リーダー的役割として機能していくことが構想の一つとしてあります。また、活発なライフスタイルの啓蒙活動を通して学生の健康や QOL を向上させることが目標であり、SFHP は、以下の事項に関して学生を教育および訓練するためのプログラムサービスを提供する上での社会的責任の一つの象徴となっています。

1. スポーツや身体活動の生理学的および心理学的恩恵
2. 身体活動やフィットネス、健康、QOL の原動力や相互作用の理解
3. スポーツや運動、レジャーと関連した精神運動スキル
4. 健全なライフスタイルを維持するのに必要な認知・行動能力

これらのサービスを推進したり学生が身体活動を行う機会を提供したりすることにより、身体活動や健全なライフスタイルの実践を通し健康維持に良い影響をもたらすような行動変容を起こさせることが SFHP の意図としてあります。このプログラムサービスは、OSU の全学生に等しく利用可能となる予定です。

#### 4. プログラム目標の概略

プログラム目標の概略として考慮すべき点は、「学生の特徴と体育に対する希望」、「構想と目標との関連」、「施設やスタッフ（これらが構想の障壁になってはいけない）」、「独創性」です。SFHP の目標は以下の 8 個となりました。

1. 健康に関連したフィットネスの向上
2. 身体活動を行う機会の提供

3. 健康維持や身体活動レベルの向上に影響する永続的な行動変容の推進
4. 生理学および心理学的な運動の利点を理解させ、適切な身体活動の選択をさせる
5. 精神運動スキルを身に付けさせ、様々なスポーツや運動、レジャー活動へ参加させる
6. 身体活動、フィットネス、健康の相互関係の理解を深めさせる
7. 一生を通して役立つ身体活動、フィットネス、健康関連行動の知識を高める
8. スポーツや健康、レジャー産業に対して、自ら判断できる消費者となるようにする

これらは、具体的に以下のようなことを意味しています。

1. 授業内の身体活動時間を最大限確保する（特に適度な運動強度を確保）
2. 運動やスポーツを健全なライフスタイルや生涯にわたる身体活動と結び付けて考える
3. 身体活動を通して教育する（身体活動は身体活動そのものや競技スポーツのためではない）
4. どのようにこの講座が健全なライフスタイルと関係しているかを認知させる
5. 健康のための行動活動は、スポーツ技術と知識を伴うことを学ばせる（例えば、週間スケジュールの立て方や運動強度について）

#### 5. プログラム内容の選択

体育のプログラムを選択する際の考慮すべきことは以下ようになります。

- 学生の興味・関心
- 学生が社会人となった時にも運動を続けられる能力

- 体育プログラムの構想および課題
- 体育プログラムの目標
- 教授の専門性
- 施設
- 様々な運動種目の選択肢を用意
- 幅広い運動技術レベルへの対応

SFHP の全プログラムの中で提供されている講座は、「フィットネス」、「各スポーツの講義・実技」、「健康」、「資格取得」、「選択」など 65 種類以上あります。四半期毎に 225 以上の多彩な授業が展開され、14,000 名以上の学生が履修します。身体活動の実技や講義、オンライン授業が昼間、夜間、平日、週末各々に開講されます。スタッフとして、2 名のプログラム・マネージャー、博士課程および修士課程在籍の 35 名のティーチングアシスタント、15 の団体からの指導者、上級生のティーチングアシスタント、大学院の管理アシスタント、2 名の教授、SFHP の教授委員会などがいます。

SFHP のプログラムの例として以下のようものが挙げられます。

フィットネス：

エアロビクス、キックボクシング、ウェイトトレーニング、ジョギング、スピニング

団体種目：

バスケットボール、サッカー、フラッグフットボール、バレーボール

個人&ペア種目：

テニス、ラケットボール、ゴルフ、体操格闘技：

空手、テコンドー、太極拳、ボクシング

水中活動：

水泳、飛び込み、水球、スクーバダイビング

その他：

スカイダイビング、キャンプ、ハイキング、ヨガ、ピラティス、トレーニング、

ヨット

ダンス：

社交ダンス、フォークダンス

講義講座：

スポーツ観戦

健康講座：

ウェルネスへの導入、癌への認識、性教育

資格講座：

First Aid & CPR、ウォーターセーフティインストラクター、救急救命士

しかし、これらについてもどのように改善していけるかを常に考えています。指導者および支援の場面にどのように新たな観点をもって対応していくか、どのようにしたら標準化された一貫性のあるプログラムを維持できるか、どのように我々の利点にテクノロジーを応用していくか、評価方法をどのように明確化するか、どのように素晴らしさを認識させられるか、などです。

## 6. 指導者および支援

オリエンテーションでは、まず各スポーツに振り分けられたフォーカスグループを基本にコミュニティを形成します。プログラムの構想や課題、内容についての説明や上級生の助言から専門的知識を共有します。各グループでは、問題と解決法を共有するために各指導者がいくつかのクラスを受け持ちます。上級者のアシスタントは、専門領域における他の指導者の補助をすることで、他のいくつかの授業が免除されます。彼らの支援として、年 4 回のミーティングを開いたり、ランチョンミーティング、招待講演、専門的能力の認定（例えば賃金アップなど、モチベーションに結び付くように）などを行い、専門的能力を開発します。また、テクノロジーを活用しオンライントレーニングを行ったりもしています。

## 7. 品質管理の導入

まずはシラバスを統一化することです。そして、客観的で透明性のある評価システムの構築が必要です。そのために、運動スキルを評価するための規定の作成や認知評価のオンライン化、優秀なパフォーマンスではなく生涯に渡り身体活動と結び付けるために重要なスキル、認知および行動への評価などを行っています。指導者教本のオンライン化やモデルコースを Web 上に公開し共有する取り組みも行っております。さらには、教職員監督委員会を設置しております。

ところで、なぜシラバスの統一化が必要かということを上げたいと思います。それは、SFHP の高い質、シラバスに必要な全ての要素、異なる指導者による同一講座の内容の均一化を保証するためです。同一講座のクラス間の不均等を最小限にし、指導者が交代し年度が変わっても SFHP の継続と一貫性を持たせることにより、学生の不満を最小限にします。また、(多くは新任や活動の幅が広い) スタッフへのカリキュラムサポートを提供することにもなります。

そこで、統一化されたシラバスの各論とは何かです。色々ありますが、まずは講座の方向性です。基礎から発展までの段階的な講座の概略までになります。次に講座の目標ですが、それには4～6の運動スキルや戦術、認知項目、行動スキルや姿勢、ウェルネス概念が含まれます。他には、テクノロジーの利用(ビデオカメラの導入など)やブロックプラン(週間毎の内容の概略)、講座の評価方法(35%:運動活動/個々のスキル、30%:認知活動/スポーツの知識、運動生理学、ウェルネス、35%:身体活動/参加態度と積極性)、出席回数も含まれます。一方、統一化されないシラバスの要素もあります。それには、本やウェブサイ

ト、資料プリント、スライド(PowerPoint)などの教材がありますが、多くの統一化された教材が提供されています。衣服や用具も統一化されていませんが、それらは活動の姿勢を反映するものであると言えます。また、評価手順は指導者の裁量です。指導者は、学生の運動、認知、行動の各々の評価を自らの手順で行います。ただし、全ての評価において、スキル、認知、行動を評価するために論理的かつ正当化された意義を持たせなければなりません。そこで、評価規定の多くは指導者に役立つものとなっております。その上で、各スポーツのフォーカスグループ毎に、独自の評価手段を開発し応用しています。

運動目標と知識目標とに関する評価システムがあり、どちらも客観的で透明性を持たせております。前者では、スキルに関する評価規定と目標到達チャート、練習に関する段階的な練習課題、ゲームプレイに関する規定の各々が授業の開始時に Web サイト上に掲示されます。そのため、学生は授業前に各課題の評価得点を知っており、壁に貼られたチャート表で目標パフォーマンスを確認しながら自分のファイルノートにそれらを記録していきます。後者に関して、知識の評価は、寿命を迎えるまで身体活動が実践できるような知識に焦点が絞られます。多くのコースは知識評価に基づいたオンラインやビデオクリップを用いており、間違ったスキルや失敗したパフォーマンスを確認したり、ゲームのクリップ映像を観て選手の次のプレーにどのような選択肢があるか質問したり、選手の動きを観て彼らにはどのような練習が効果的かを質問したりします。他の評価には、スポーツと健康への効果を含んだ Wellness 概念などに関するものがあります。オンライン評価は、客観的でありかつ授業時間に束縛されないところに価値があります。

指導者のための教材などもオンライン化され共有されています。On-line instructor resource center には、統一化されたシラバス、ブロックプラン、練習や運動方法、プリント資料、課題（宿題）、評価規定、試験例題、ビデオクリップ、Web サイトと本、プレゼンテーション用スライド（MS PowerPoint）などが用意されています。“分かりきったことを最初からやり直さない！” ことです。多くの専門家が存在していますし、優れた指導や評価の方法がこれまでに研究されてきています。これらをプログラムに反映させるべきでしょう。また、フォーカスグループは革新的な指導法について話し合うために集まる機会を作るべきでしょう。

私たちの大学は全ての講座で Web サイトを開設しており、SFHP 講座も Web サイトを発展させています。シラバス、スライド（PowerPoint）講義、プリント資料は勿論のこと、議論の場や課題提出箱なども置いています。さらに、小テストや個別指導に基づいたビデオ、配点を明記した採点簿なども用意してあります。

また、SFHP のプログラムディレクター、スポーツ、体育、運動科学の学科長、運動生理学、運動学習および発育発達、運動行動、スポーツマネジメント、体育科教育の教員、SFHP の代表者から構成されている SFHP 監督委員会もあります。SFHP の目標や内容に対する助言、プログラムの政策決定、研究結果に基づいた方向性の決定、SFHP 内における研究活動への奨励、教授陣の専門性を高める為の支援、プログラム評価の実施、などが主な役割となります。

## 8. 優秀者の認定

各講座における教育について学生が評価をしますが、SFHP のプログラム・マネージャーはそれらに非常に高い信頼をおいて

います。各講座の Web サイトシステムを利用し、表彰に値する優れた教育を行っていると思う指導者を学生が推薦します。評価の高い指導者に対して表彰し商品券を送ります。これには、学生の推薦によるティーチング賞と、スタッフや指導者の推薦によるサービス賞があります。

## 9. 方向性や評価および見直しと修正

最後に、筑波大学における方向性について考えてみましょう。

筑波大学における体育プログラムはどこへ向かうのでしょうか？筑波大学の使命は、「非常に有能な人材の育成」、「社会的意義のある研究」、「社会貢献」を柱とした6つの目標となる領域があります。恐縮に存じますが私の考えを述べさせていただきますと、体育プログラムは、大学の使命に貢献する中心のかつ独特な役割を担うものと思います。学生が、身に付けた様々なスキルを効果的に21世紀の世の中に適応させていくには、彼らを活動的、健康的かつ生産的な社会人として成長させる手助けが必要です。その役割を担うことができるのは、大学の体育プログラム以外にはありえないと信じています。

### 質疑応答：

— 坂東隆男先生（大阪大学）

OSU における PE プログラム（SFHP）の変革の過程の7番目に質のコントロールを挙げられ、シラバスを統一されているということでしたが、評価の管理はどのようにされているのでしょうか。

> Dr. Jackie Goodway

学生も自ら判断できるように、明確な評価ポイントを示しています。例えば、服装がちゃんと運動に合ったものかどうか、挨拶をしたかどうか、学生同士の話し合いに

参加したかどうか、励まし合いが合ったかどうか、積極的な活動をしていたかどうか、などです。評価項目毎の点数も明示されており、学生が今日は何点取れたのか分かるようになっています。そして、学生自らの評価と指導者による評価を合わせて最終的な評価点をつけることとなります。

#### 基調講演

清水一彦先生（人間総合科学研究科長）

#### 「大学体育」の歴史と未来について

人間総合科学研究科は、7つの専門領域（教育学、心理学、障害科学、体育科学、芸術学、医学、看護科学）を持ち、教職員数は1,260名、学生数は1,500名を越える学際融合型の大研究科であります。その中で私の専門は「教育学」ですが、ここでは「高等教育について」、その中でも特に「大学体育」について繙いていこうと思います。

日本の現行の大学制度に体育が入ったのは戦後であります。1949年に新制大学が発足し、今年でちょうど60周年を迎えますが、「大学体育」はまさに日本型の制度であります。それまでは、大学で行う高等教育では、ヨーロッパ型のように専門教育を充実させればよいという考え方が主流でしたが、そこから大きな変換をし、一般教育（教養教育）の重要性が見直されるようになりました。これは、アメリカ型の制度でありました。但し、アメリカでは多くの場合「体育」は行われていませんでした。日本でも初めから組込まれていたわけではありません。1947年、当初の新制大学の構想では、体育は高等教育に組込まれていませんでした。ここでは完全アメリカ型を採用しようとしていた訳ですが、体育連盟等や各方面からの強い働きかけが当時の文部

省を動かし、その2ヶ月後には高等教育へ体育を組み入れるように答申がなされ、その結果、体育が大学の卒業要件に組込まれることになったのであります。大学卒業の必要単位数は、当初の設計では120単位でした。しかし、それが124単位となっているのは、まさしく体育の単位分、4年間で4単位というその体育分であるのです。

大学の卒業単位の策定というのは非常にシンプルな考えの基に行われました。1単位は45時間の学習に相当します。月曜日から金曜日まで1日8時間学習し40時間、さらに土曜日は5時間として計45時間となります。前期で15週行えば15単位となり、通年（1年間）で30週行えば30単位、それが4年間として120単位となる訳です。これは、当時の労働時間に合わせて設計されたものです。学生の学習時間は、労働者の労働時間と同じように作られました。現在は、労働基準法によりその労働時間の基本は1週間で40時間とされており、4月からは、さらに休憩時間等を考慮に入れられ38時間45分と削られてきています。これらのことを考えますと、学生は本来的な意味からしたらもっと学習時間を減らさなければならぬ、ということになるのでしょうか、そこまではなかなか追いついていないと申しましょうか、言い過ぎかもしれません。

これらの経緯を踏まえても、体育が大学の卒業単位、必修単位に組込まれているというのは、まさに日本型のシステムであるということ、大学人は共通認識として持つ必要があるのではないのでしょうか。

筑波大学は1973年に開学致しました。新構想の大学として設計された筑波大学ですが、その経緯の一つに体育が挙げられます。体育実技は全学生に履修してもらい、可能な限り多くの種目を準備し、保健管理センターにて健康管理を行う、という構想

があり、それと同時に2つの特例措置を設けようということになりました。1つ目は、課外活動を単位として認定する、2つ目は、専門学群の学生の体育実技は専攻科目に振り替える、というものでした。ついでに体育以外で申しますと、共通科目として芸術科目を用意しよう、さらにはオーナーズプログラムを設けよう、という構想もありました。オーナーズプログラムとは、学業優秀者のための特別なプログラムで、入学試験で成績優秀学生には授業免除したり、特別科目、一部別メニューの科目、を履修できるようにしたりするものです。開学から35年が経ちますが、現在のところ体育実技に関する2つ目の特例措置については実現していますが、1つ目の特例措置に関しては未達成です。また、芸術や特別プログラムに関しても未だ実現していない状況です。特に体育専門学群の学生を考えると、体育実技の1つ目の特例措置、課外活動を単位認定すること、に関しては、早期実現が望まれます。

開学から10年後に自己評価を行い、最終的には15年かかり自己点検評価報告書がまとめられました。1988年に10周年を記念したものとして、企画調査室より「筑波大学の自己評価と改革の指標」としてまとめられています。これは、私がこれまで見た自己点検報告書の中で、一番素晴らしいと思っていますが、外部の人、当時の文部省の担当の方もそう言われています。そしてそれは、今でも読む価値が充分にあるものだと思っています。

その中でなされている筑波大学の体育の評価は、非常に高いものです。特に、体育センターを中心に運営がしっかりしている、責任組織として体育センターの組織運営が非常に優秀だということと、幅広い選択種目と専門性の高い指導で優れた成果を上げている、種目の多様性と技術指導の専門

性に突出しているということが挙げられています。それらについて、他の科目ではあまりかんばしくない、体育は最上級の評価を受けております。また、課外スポーツ活動の場として86団体あり、半分以上の学生が活動しているということも長所として挙げられておりました。ある私立大学では、認証評価を受ける際に全学生の7割が課外活動をしている、ということが特筆すべきこと、長所として明記されました。筑波大学も再来年認証評価を受けますが、現在の課外活動の状況は、(宮下憲教授 “体育・芸術・文化の全3系への参加者が全学生の73%、体育系への参加者は45%です” )、ということですので、特筆すべき長所として挙げられるのではないのでしょうか。

ただ、その当時において、学問の高度化、多様化で学ばなければならない知識量が増え、専門分野を増やすためにそれを重視しなくてはということで、共通科目に白羽の矢が立ちました。体育実技は2年次までで終了したい学群・学類があるであろう、という文言が入っており、1988年の当時より、保健教育と合わせて4単位でもいいのではないか、実技は2単位でもいいのではないか、という意見がありました。その後、平成3年(1991年)の大学設置基準の大綱化がなされた翌年、筑波大学はいち早く改革に取り組みしました。共通科目の単位数が半分に、体育実技も2~4単位の幅の中で学群毎に自由に決められることとなりました。

この平成4年度に行った大学カリキュラム改革は、失敗だったと反省しております。あれが筑波大学の良さや、日本の大学教育の根幹を崩してしまったのではないかと考えております。平成3年度以降、国立大学は完全に専門教育にシフトしてしまいました。ところが、その当時の文部省の大学設置審議会の中には、専門教育と一般教育

(教養教育)のバランスを取ることとも書かれていました。教養教育の重要性は当初から認識されておりましたが、体育や他の共通科目が、改革の煽りを食らってしまったということでもあります。

歴史の原点に立ち戻って、124単位の4単位を勝ち取らなきゃいけないんだ、という思いを持ち、このようなフォーラムをきっかけにそれに向かって取り組んでいてもらいたいと思います。

ここからは未来的な展望について述べていきたいと思います。

体育にとって明るい話があります。まずは昨年、政府が主導する教育振興基本計画の5ヶ年の重点項目が発表されました。これは、学校教育に留まらず大学院における教育も含めてのものです。その中で、「豊かな心と健やかなからだの育成」というものが掲げられています。この「健やかなからだの育成」は、まさに体育が担うべきものであり、生きる力の1つとして体育があるんだということです。また、第二次補正予算が組まれる見通しとなり、教育への予算も増えることとなります。筑波大学も予算獲得のために計画を立てているところですが、そのテーマとして「健康長寿」があり、筑波大学はそれで進めていこうと作業中で、年間数億円の事業を計画しているところ です。

それに関連し、4月から筑波大学の新執行部の中心、次期学長となられる筑波大学附属病院の山田病院長が、ミーティングの中でキーワードを挙げられました。それは、「いのち・からだ・こころ」です。「いのち」はライフサイエンス領域、「からだ」は体育、「こころ」は心理や感性、保健管理センターということになるのでしょうか。また、筑波大学の国際化構想としまして、ただ単に留学生や教員の受け入れだけではなく、この

つくば地区の国際化を進めていきたいということでした。そしてこの筑波大学が、つくばの国際拠点として機能することが必要であるということです。そして、つくば地区全体を通して、「いのち」は大学病院が、「からだ」は体育が、「こころ」は保健管理センター等が各々中心となり教育、研究、支援活動を行っているのではないかと考えております。

もう一つ実務的なことについて述べたいと思います。現行システムにおいては、体育実技担当の先生は不利であると申しますか、授業負担が大きい状況にあります。1単位は45時間分の学習が基本となっていますが、講義、演習、実技と各々時間数の配分が異なっています。旧制大学から新制大学への移行に伴い、単位数を増やすための苦肉の策でありましたが、学生の自主学習を促すためのものでもあります。講義では、学習時間の3分の1を授業で、残りの3分の2は自主学習ということになっておりますが、実技ではその全てを授業、現場で勝負しろということになっています。これは、学生に自主学習はするなどと言っているのと同じことであり、単位制度の主旨から大きくずれています。平成3年の大綱化により、実技も30～45時間の幅の中で各々の大学の裁量に任せられることになりましたが、筑波大学は依然として45時間を1単位としております。よって、講義は1時間の授業とその2倍の時間を自主学習に任せるということになっているのに対し、体育の実技担当の教員は、3時間全てを授業として行わなければなりません。3倍の拘束時間が取られ、教員の負担が大きくなっています。負担は3倍、評価は3分の1という現状があるかと思われますが、大学体育を1つの科目として成り立たせるためには、自主学習、つまり課外活動や自主的トレーニングを行った時間も授業の一環とし

て認めようと、そういう主張をしていくべきだと思います。それによって、教員の数を減らすことにはならないと思います。負担を軽減して評価を上げていくためには、単位のカウント方法の工夫が必要でしょう。

昨年の会議において、この4月より、教員の評価に平均水準という考え方を取り入れようということになりました。平均水準とは、授業時間数や受講学生数などの全体の平均を算出し、そこから上か下かという判断をしようということです。体育は、負担も大きく学生も多いと思いますので、体育の先生方は概ねプラスになるというイメージを持っております。学生からの授業評価では、体育が常にトップであります。単位の見直しや教員評価を通し、体育の明るい未来が見えるように折っています。

我々の教育学の研究室では、知育や徳育など7つの生きる力を上げておりますが、その一つが体育です。高校までの教育で生きる力を身につけ、大学で生き方を学ぶことが必要であり、そのためには体育の発展が重要であると考えております。筑波大学は、大学院科目にも共通体育が入っており、生き方を学ぶ上で非常に充実していると思われれます。

最後に、文部科学省の泉局長もおっしゃられていたことでありますが、これからは寄付金をはじめとする外部資金の受け取りや収益事業を大学独自で行うことが難しくなると思います。したがって、教育事業などを立ち上げるには、Tsukuba Sport Associationのような団体を設立して活動を行った方が良いでしょう。

## パネルディスカッション ショートプレゼンテーション1

鈴木守先生（上智大学文学部教授）

上智大学におけるカリキュラム改革について

上智大学では、一般体育は全学共通教育として開講され2単位が必修となっております。これまでの体育を平成20年度の一年間をかけカリキュラム改革を進め、この4月、平成21年度より新カリキュラムをスタートさせる所です。新しいカリキュラムについてはこれからのことなので、まだ目に見えない所も多々あります。この機会に改めてそのような点を確認できたら良いと思っております。

まずは新カリキュラムを進めるにあたって、これまで8年間使用していたテキストを刷新し、新たにテキストを作成しました。現在は最終校正段階にあるのですが、これまでは「身体のリベラルアーツ－ウェルネスの理論と実践－」としていたテーマを、新テキストでは「身体のリベラルアーツ－ウェルネスと身体－」と変更しました。これにはあるきっかけがあります。

上智大学では、各学年、各学科で最も優秀な学生に奨学金を出して表彰する催し物があります。数年前のその会の際、1階の表彰式会場から6階のパーティー会場に移動しなければならなくなった時、既に5分程時間が過ぎていたのにもかかわらず、200名程いた学生の誰一人として階段を使う者がおらず、全員がエレベーター待ちのために列をなしていました。学生で溢れかえったエレベーターホールを尻目に私や他の教員は階段を上がりパーティー会場に向かいましたが、その学生の列をなしている光景を目の当たりにしたのをきっかけに、我々が今まで行ってきた体育はそれで

よかったのだろうか、と疑問を持つようになりました。それまでは「ウェルネスの理論と実践」というテーマの中で、いわゆる健康や体力という概念を含んだ「からだ」とその他の「こころ」とを切り分けて捉え、実際に「からだ」は体育が「こころ」は心理が担うような状況でした。しかし、それでは駄目なのではないかと考えるようになり、これらを区別せず丸ごとの人間として捉え、他では代替できない、保健体育だからこそできる、あるいは保健体育でしか関われないことはないものかと暗中模索しておりました。その中で行き着いたのが「身体」という概念でした。これまでの「健康」や「スポーツ」という概念の前提、上位概念として「身体」があるのだということです。

今まで学生に対する授業では、どこか暖簾に腕押し的な感覚を持っていましたが、それでも、からだ、こころに関わる問題を多く抱えている状況を感じていました。授業中に携帯電話をいじる学生も相当数おり、それはすぐにレスポンスしないと仲間外れにされるかもしれないという恐怖心、脅迫観念からでもあり、心の問題が大きく関わっています。一方、1、2日間寝なかったり、ジャンクフードを食べ続けたりしても平気でいたりもします。そのような学生にアプローチし、「からだ」と「こころ」を丸ごと捉まえることが重要であると考えられます。今は、デジタルツールを通した自己表現に偏重されていますが、「からだ」をメディアとした人とのコミュニケーション、集団の中で自己主張する機会を持つことも大事であり、これらのバランスが取れた学生の育成が必要であろうと考えております。

この一年間模索してきて「身体」という言葉、概念を用いて授業を語り始めると、これまで保健体育研究室の教員内でしか語れなかった授業のことに、他学

部、他学科の先生方と共通の土壌で話すことができるようになりました。「身体」という概念を用いることによって、哲学、国文学、心理、社会学など様々な分野の先生方とコミュニケーションが取れるようになりました。今までも改革はしてきていましたが、それは狭い世界、限られた者の中でのことでありました。今では体育のあるべき姿についても、広く多くのアドバイスを頂いております。

身体はメディアとして捉え、横のコミュニケーション、共生する集団の中で人とどう関わって豊かさを実現していくか、その知恵を少しでも学生に見出していってほしいと願っています。保健体育というオリジナルな領域から、そのために必要であると思われることを提案していきたいと思えます。それらの理念を、「はじめに」ということで新テキストの導入に書かせてもらいました。これからはスタートとなりますが、この理念の基、新カリキュラムが機能していくように進めて行きたいと思っております。

## ショートプレゼンテーション2

鈴木久雄先生（岡山大学スポーツ教育センター教授）

## 現代 GP の内容、成果、展望について

岡山大学が平成17年度に採択された、現代GPの取り組みの内容、成果、展望について紹介したいと思います。プログラムのテーマは「バリアフリーによる双方向スポーツ教育活動 - University・Community・Companyの協働で拓く」です。岡山大学には1万4千人程の学生が在籍しておりますが、大学と地域とで人材・空間・時間について双方向の交流を行い、スポーツ教育活動を実践していこうという取り組

みです。

岡山大学では、平成18年6月に現代GP推進施設として、スポーツ教育センターを発足させました。学生のコミュニケーション能力の向上、社会性の向上を通して、地域でのファシリテーターの育成を目指すことが目標でした。その枠組み中の教育活動として、新たな3種類の授業を展開しました。スポーツサークル活動実施型、スポーツ教室開催型、スポーツ指導練習型というもので、各々スポーツ実習D、E、Fとして開講しました。スポーツサークル活動実施型は、5月にオリエンテーションを行い、スポーツ講座を年5回以上受講しながらスポーツ活動を自主的に行ってもらいます。スポーツ講座は、年16回開催される公開講座の中から選択して受講し、スポーツ活動は、行った活動、筋力トレーニングやストレッチなどをスポーツトレーニングノートに記載して1月に提出します。その受講実績とトレーニングノートの内容を加味して単位認定が判断されることとなります。スポーツ教室開催型は、4月にスポーツ教室の企画書を提出し、年5回以上の教室開催を行いその報告書を1月に提出します。このコースでは、ボクシング部のボクササイズ教室、水泳部の水泳教室などを行っており、他にはハンドボール部やボート部、卓球部もスポーツ教室を開催しております。スポーツ指導練習型は、スポーツ教室開催型と同様、4月にスポーツ教室の企画書を提出し、年5回以上の指導を行いその報告書を1月に提出することとなりますが、主な活動場所は小・中・高等学校の部活動や地域のスポーツ教室です。部活動には、野球部、ソフトテニス部、バスケットボール部、陸上部、バドミントン部、弓道部、馬術部などが参加しており、スポーツ教室には、ランニング（陸上部）や自転車（自転車競技部）、バレーボール部、ア

イスホッケー部、フィギュアスケート部、剣道部、テニス部、サッカー部、体操部、ラグビー部などが参加しています。

スポーツ教育センターではスタッフも充実させ、学生のフォローや地域貢献を行っております。スポーツ相談室を設置し、主にメール相談ではありますが、スポーツ障害、歯科、トレーニング、メンタルトレーニング相談や指導を行っております。また、地域での健康づくりのために出前講座を開いたり、スポーツボランティア養成のために運動普及応援団づくり講座を開いたりしております。

岡山大学のスポーツ教育センターのこれまでの取り組みをまとめると、新しいスポーツ実習3種類を開講、スポーツ講座への参加を講義に振り替え、スポーツ医科学情報発信、4種のスポーツ相談・指導、障害者スポーツ支援、出前講座、スポーツボランティア養成、の7項目が挙げられますが、そのうち前半の5つが双方向スポーツ教育活動となるでしょう。

成果としては、授業の前後で学生のコミュニケーション能力の向上がみられました。コミュニケーション能力は、自己統制、表現力、読解力、自己主張、他者受容力、関係調整力の6項目に分けて調査しましたが、スポーツ教室開催型ではその全てが僅かずつ向上し、スポーツ教室開催型の部活動参加組では表現力が向上し、地域教室参加組では表現力、他者受容力が向上しておりました。

大学の活動は、研究、教育活動、地域貢献の3つが三本柱となります。岡山大学スポーツ教育センターでは、これら3つを双方向で結びつける活動を推進してきましたが、北京オリンピックやパラリンピックへ選手を輩出することもできました。現代GPの申請内容・取り組みは、ほぼ軌道に乗せることができ、これらの取り組みに

よって学生のコミュニケーション能力を向上させられる可能性が確認でき、スポーツ教育センターの常設化や教員の増員をすることにもなりました。

今後の展望と致しましては、IT健康づくりシステムを構築することです。岡山大学の非運動部活動者は男子で70%、女子で82%に及びますが、その非スポーツ活動学生に対するアプローチが重要と考えます。IT運動プログラムを活かした健康教育を行い、履修後、卒業後も学習の場を提供し生涯教育を実践していくことが課題です。現在でも小規模で実践されていますが、その効果として介入群で運動量が増えたことが明らかになっています。今後は、このシステムを更に広げて更に効果を上げていくことが課題であると思っています。

### ショートプレゼンテーション3

緒方良先生（日鐵商事株式会社名古屋支店副支店長）

#### 企業サイドからみた必要とされる人材

私は学生時代からバレーボールのナショナルチームに選抜され、卒業後は新日鉄に入社し、選手・コーチ・監督と経験しましたが、合わせて9度の日本一になることができました。私もナショナルチームの監督を務めました。最近のナショナルチームの監督には、男女とも全て新日鉄のOBが就任しています。そのうち私だけが監督を辞めてすぐに商社マンとしてサラリーマンになり、現在は名古屋にいます。リーマンショックやサブプライムローン、CDS（クレジット・デフォルト・スワップ）問題などに端を発し、トヨタの膝元でもあり不況の煽りをまざまざと見せつけられています。

そのような厳しい競争社会の中でどんな人材が必要とされているのでしょうか。私

はサラリーマンをしながら今なおバレーボールの指導・普及に携わっております。中・高のバレーボール指導者、部活動の顧問、特に未経験の方々に指導資格を取得してもらおう中で指導者の育成・指導をしています。彼らは普段、生徒には授業中に寝るなど指導しているはずなのに、休憩をはさんで3時間の講義中に約半数の人が寝ています。いつも学校で寝たら起きると注意しないのかと尋ねると、寝ているのは本人ではなくてつまらない授業をしている先生に非があり寝ている子は悪くないとおっしゃいます。私が寝ている先生に質問をして寝させないようにして、先生に社会人教育をしているような変な授業を行っている現実があります。

社会、企業は組織で動いています。例えば個人商店であっても仕入れ先等があります。一人は点、二人は線、三人は面となりますが、仕事は必ず面で行えと言っています。面ですするためにはコミュニケーションが不可欠です。そしてそのスタートは挨拶です。最近では、会社に来てからそれを教えなくてはなりません。大学で何をしてきたんだと思います。入社式ではきちんとした身なり、姿勢、礼をしますが、翌日からは何もできません。それは習慣化されていないからです。人の目を見て話せない、こういう人は大抵管理職にはなりません。企業の求める人材には、勿論様々なスキルが必要とされます。しかし、挨拶や礼ができない人は社会では全く通用しません。ある大学体育では、授業を始めようとする時に挨拶も無しにガラガラと始まりガラガラと終わりにしてしまいます。企業の会議でも3～5分前から席に座り、終わりにも合図があります。挨拶や時間厳守、礼などの当たり前のことを当たり前にやれなくてはなりません。大学体育では、こういうものをきちんとやってもらいたいです。

授業や学生だけではなく、スポーツの選手にも同様のことがあります。国旗掲揚の時に、しっかり立ってじっとして国歌を聞いていられないような選手には、クイックも教えられません。現在のバレーボールのナショナルチームの植田監督は、選手にヒゲを生やすな、茶髪は禁止、と指導していますが、そういった基本的なところから指導していったおかげで徐々に強くなり、近年遠のいていたオリンピックにも出場できました。当たり前の方ができた上で、当たり前前以上の事ができるようになるのです。

少し話はそれますが、運動部では一貫指導システムを必要としています。ヨーロッパで研究されているのは、日本の学校の部活動です。ヨーロッパは地域のスポーツクラブを中心にスポーツの普及・強化や選手の育成等がされています。それに習い、新日鉄は大阪の堺市と共同し堺ブレーザーズを立ち上げましたが、未だにうまくいっていません。自ら活動費を稼げておらず、限界かなという気がします。日本では、勉強ができなくてもスポーツができれば、中学校でいい選手となれば推薦で高校、大学、企業とエスカレーター式に上がっていきます。しかし、頭の悪いやつは上手くなりません。頭の良いやつは上手くなります。研究してみると、小学校から中学校で基礎学力をしっかりと身に付けられていなければなりません。勉強しながら運動する子とそうでない子で差が生じます。バレーボール学会で「バレーボール百年構想」を掲げました。クラブ活動と平行して、基礎学力をしっかりと付けさせながらでなければなりません。レベルが上がれば上がる程、自分で聞く力、読む力がないとそこで選手としての成長が止まってしまいます。例えば、同身長のアメ리카選手と日本選手がいた場合、アメ리카の選手は科学的論文をどんどん読めたり、指導者の言葉が耳に入り、話

ができたりします。ところが日本人選手は、身長が大きいだけで指導者が何を言っているのか分からない、話ができない、論文も読めない、レベルが上がっていくと伸び悩んでしまいます。大抵の選手が最終的に企業に入りますが、30才まではいい選手として重宝されますが、それ以降は辞めていくか残っても会社の仕事ができずに窓際に追いやられます。

どんな種目でも、この競技をやっている子供達は本当に基礎学力があるなど、しっかりと一貫指導を行っているなど社会にも認知されれば、企業も本当に非常に採用しやすいものです。協調性、バランス、コミュニケーション能力を兼ね備え、さらに、企業との間に交渉にも入れるような人材が社会では求められます。

#### シヨートプレゼンテーション 4

鍋倉賢治先生（体育センター准教授）

筑波大学体育センター開講科目「つくばマラソン」について

「つくばマラソン」は、筑波大学の体育センターが開講する科目ではありますが、非常にユニークな授業であって必ずしもスタンダードではないかもしれません。マラソンの愛好者は30年以上前から増加してきており、さらにここ数年は、マラソンブームといわれる状況になっておりますが、この「つくばマラソン」は現在のブームより以前から開講され、平成21年4月で18年目を迎えます。

開学当初より、体育センターでは全学の学生に対し体力測定を実施しています。12分間走のデータは持久力の指標となりますが、男女とも年々きれいな低下を示しています。また、筑波大学は広大な敷地なので、よく動き歩いていると思われがちですが、

実は広大な敷地ゆえにほとんど歩かず、学生の歩行量は高齢者並みであることも明らかになっています。これには、コンピュータを代表とするバーチャル世界やITの普及に伴うコミュニケーション能力の低下、無気力・不活動、体力の低下、感性の埋没、努力を惜しむ一攫千金願望といった現代社会の問題も関与していると思われれます。それに対しスポーツは、生身の体験（リアリティー）を特徴とし、他者との関係、気力、実際の活動、体力の向上、感性の刺激、継続的な努力を含みます。体育センターの理念は、「生涯体育」と「健康・体力の増進」ですが、それらはすなわち、「自立的に自己を成長させ続ける力」を獲得させます。この力の獲得に向け、「スポーツを通じた人間教育」という共通理念をもって各教員が活動しております。

基調講演にて、清水先生が“大綱化が大学体育を衰退させた”とおっしゃっておりますが、「つくばマラソン」は大綱化を受けて自由科目として開設されたので、矛盾した科目、負の遺産と言えるのかもしれませんが。毎年11月下旬に1万人以上が参加する市民マラソン大会を活用した授業であり、「講義・実技」、「自主トレーニング」、「マラソン挑戦」の3本柱を掲げています。学んで、応用して、生活化することを、マラソン挑戦の過程で実践することにねらいがあります。マラソン挑戦の持つ教育的価値は、数ヶ月のトレーニングが絶対必要であり、継続的に徐々にステップアップしなければならないことと、心身の限界にさらされることにあります。授業は、トレーニング学から生理学、スポーツ医学、栄養学などの講義を織り込みながら実走します。ただ、週一回の授業で走るだけでは不十分なので、実際は自主トレーニングがメインとなります。学生自身が計画を立てそれを実践し自己評価を行う、学生自身が

Plan-Do-Seeを進めていきますが、それを支援するためにトレーニング日誌を用いています。毎週、それを基に指導者がアドバイスをを行い、学生はそれを次の練習計画の参考にします。また、過去の受講者が再度受講し、練習会などを発起、企画したりもしています。講義と実技で学び、自主トレーニングに応用し、受講後もマラソン挑戦を生活化させており、まさに「自立的に自己を成長させ続ける力」を醸成しているといえます。教育成果としては、ここ数年は毎年100名以上の学生が受講し、非常に高い確率で完走しています。また、平均して週2回以上のトレーニングを行っていることに加え、卒業後も継続する者やボランティアスタッフとして参加する者も多く、スポーツが生活化されているといえます。また、受講生としての受身の立場から受講後もリーダー的な役回りを演じる能動的な活動へと発展させていることも特徴として挙げられます。個々の学生の内面的成長としては、たくましい精神力とチャレンジ精神の獲得、自己効力感や社会性の向上、問題への対処力の向上、能動的行動力の獲得などが挙げられます。これらは、決してマラソンを完走したから得られたものではありません。自己効力感はレース前に既に向上しており、トレーニングに対する自己評価と関連していることが調査によって明らかになっているのです。大多数は達成感や自信を求めて受講しますが、得たものとしては仲間・他者の存在の方が大きいことが同じ調査から分かっており、マラソンへの挑戦の過程でこれらの能力や人間性が育まれていくものと考えられます。

続いて、筑波大学の卒業生を対象に行った、「卒業して考える「体育」の意義に関するアンケート調査」の結果について紹介します。全学を対象とし開講されている共通科目の満足度の結果では、他の科目と

比較し、体育の満足度が非常に高いことが示されました。主成分分析によって満足度特性を検討したところ、第一主成分として、「授業計画」、「教員の意欲」「教育内容」が抽出され、いわばソフトの充実が満足度に大きく貢献していることが分かりました。第二主成分では「施設の利便性」、「開講科目」、「種目の選択方法」が抽出され、当然ではあるのですがソフトの次には、いわばハードの充実が大きな要因になっていることが分かりました。

筑波大学で受講した体育が現在の生活や仕事に役立っているかの質問には、約5割に及ぶ者が役立っていると考えており、現在でも7割近くの者が週に1回以上、定期的に運動を行っていることが分かりました。これは非常に高い割合であると思われる、体育がスポーツの生活化に一役買っていることを窺い知ることができました。具体的には「健康・体力の維持・増進」はもちろんのこと、「技能の習得方法」や「人間関係」、「コミュニケーションスキル」、「忍耐力」、「苦手意識の克服」などに貢献していました。実際には、「つくばマラソン」の受講者でも、週1コマの授業で学んだことを能動的に応用し自主練習へと変容を期待するのはなかなか難しいことでもあります。そこで、その変容を促すような働きかけが重要となり、練習日誌の活用や声掛け、見守りなど様々な支援を行っています。また、その応用の段階をより大きくすることがスポーツの生活化への最重要課題となります。「つくばマラソン」では自主練習の段階となりますが、リピーターによる練習会の他に、受講生同士の励ましが非常に大きな影響を与えています。その延長線上にマラソン挑戦という目標がありますが、競争ならぬ仲間と共に走り「共走」することが、「自立的に自己を成長させ続ける力」の獲得に大きく貢献しています。

大学体育の理念である、学ぶ、応用する、生活化するためには、目標となるスポーツイベントを利用することも一つの方法であると思います。マラソンだけではなく、他のスポーツでも十分可能ではないでしょうか。大学では、どうしても学ぶ講義や実技に重きを置いてしまいがち、時間を掛けてしまいがちですが、それらを応用できることが大事であり、学生が自発的に行動し成長できるような支援、投げ掛けが有効であると思います。それは決して新しいものではなく、原点であり温故知新なのかもしれませんが、一つのモデルとして提案できるのではないのでしょうか。

#### 質疑応答

— ショートプレゼンテーションの内容を踏まえ、以下の4点に焦点を当ててパネルディスカッションを進めて行きたいと思います。

1. 大学教育における体育の位置づけについて
2. 大学の外、社会からみた大学教育あるいは大学体育への期待、注文。また、我々はそれにどう応えていくべきか。
3. 各大学のFDの取り組みについて
4. 大学体育の未来について

大学における体育をどう位置づけるか、我々のゴールをどこに置いたらいいのかについてですが、まずは海外の状況をゲストのお二人に聞いてみたいと思います。

> Dr. Jackie Goodway

元々イギリス出身で現在はオハイオ州立大学にいますが、イギリスでは、大学では体育はほとんどやっていません。地域スポーツとして活動している学生はいますが、清水先生がおっしゃっていたように、大学体育は非常に日本独特のものであるように

感じます。

> Dr. Zhang Bing

身体、こころとからだを一緒に鍛えるためにどのような取り組みをしているかという、清華大学では、マラソンと水泳を必修にしています。その中で、苦しみを乗り越える体験をさせることによって身体を鍛えていこうとしています。

— 清華大学での取り組みは、高等師範学校時代に、柔道、マラソン、水泳に取り組んできたことと同様ですね。

Dr. Zhang Bingが「身体」の鍛錬ということを言われましたが、「身体」という概念に行き着いた経緯について鈴木守先生、教えて頂けないでしょうか。

> 鈴木守先生

今の学生と接していて最も強く感じるのは、右肩上がりの体験をしていないということです。昔、我々の時代には、先に進めば何か光が見えてくる、開けてくるという感覚がありましたが、今はなかなかそういう発想に立てません。また、自分を評価する尺度を、他人の尺度からでしか見られない学生がほとんどです。

彼らの育った社会というのは、「身体」を長い間ネグレクトしてきた社会です。それは「知」ではなく、大学にとって必要なものではないとされてきました。しかし、今こそチャンスであり、闇の中にチャンスはあるもので、それを見つけていくことが大事なことだと考えます。その中で、健康、スポーツ、身体とは何かを見つけ出せばいいのではないかと思います。

これまでは、データの平均を基本に学生をそこに一律に追込もうとしていました。これからの上智大学は、健康から離れ、「身体」から健康、スポーツを見直していける

ように、自身の「身体」を見直すことから始めていこうとしています。健康ブームや健康至上主義でそれらが市場化する中、自分の目でしっかりと確かめながら、自分なりの健康観を見つけられるような教育をしてこなかった反省があります。オリジナルな身体をベースとした教育を進めていこうとしています。

— 筑波大学でも、「ボディワーク」という身体の動きに注目した非常にユニークな授業を遠藤先生が行われておりますが、どのようなものかご紹介頂けますか。

> 遠藤卓郎先生

清水先生が講演で言われていた、「いのち」・「からだ」・「こころ」というのは非常にいい言葉だと感銘を受けました。その中でも、やはり「いのち」を育むことが大事であると思います。「いのち」は「からだ」あってこそのものであり、「からだ」と「こころ」はリンクしています。よって、「いのち」の意味を考えていく体育、それを飛躍させていく体育でなければならないと思っています。まずは「からだ」を考えないと、大学教育の中で、本当の意味で体育が位置づいていかないのではという気がしています。我々が生きていくのはどういう意味を持つのかということにまで、体育で求め掘り下げいけたらいいと思っていますが、そのキーワードは「からだ」であると思っています。ちょっと飛躍し過ぎた意見だったかもしれません。

— 運動学の立場から朝岡先生いかがでしょうか。

> 朝岡正雄先生

専門は現象学的な運動学です。まず、我々にとって「からだ」というのはそのまま

は存在していません。運動経験を通して、初めて我々にとって「からだ」が存在する、形成されることとなり、いわば実在ということになります。「からだ」という言葉を使うと、どうしても「体力」というイメージができてしまいます。その「体力」とは本来見えないものであり、何か測定してみても初めてそうなんだと気づくものです。ただ、その物差しは、本当は運動そのものであり、「体力」を測るのにその運動は相応しいものかどうか疑問もあります。例えば、知能を測るのに知能テストを行い、成績が良かったから本当に知能が高いかどうかはよく分からないのと同様のことが、体力にもあるのではないかと思います。そういう意味で、「からだ」とか「身体」とか「体力」とかいう言葉をやめて、もう一度運動そのものに返ったらどうかと思います。運動は、それができるかできないかであり、それらを修正していくものです。運動体験を通して、感じることで動くことが一緒に起こっています。感じられないと動けない、動けないと感じられない、この二つの能力は人間が生き活きとありありと動いているという体験に備わっているものです。そういうものを子供たちに体験させることが、人間性を養い人間としての能力、総合力が高められるんだと思います。単にできることに価値があるとかないとか、身体的な能力が高いとか低いとかではなく、もっと高適な話があるはずで。どうも体育というと単純な体力に話が向いてしまい、子供に体力がないからといって体力をつけようとしません。鍋倉先生の発表で学生の体力低下のデータがありましたが、実はもっと重大なことが起こっているように感じます。学生が全く運動できなくなってしまう。運動能力がなくなってしまう。でんぐり返しができない、下手をすると、走るとか歩くこともできません。この現実を

無視して体力がないと論じることはできません。できれば皆さんで、“運動すること自体に意義がある”ということの子どもたちに伝えていって欲しいです。

— 今の意見に対し、体力の観点からどうでしょうか。

>大森肇先生

運動生理学・生化学を専門とし、平成4年から「フィットネストレーニング」を担当しています。私自身のバックグラウンドや教育経験から、働き始めて15年程はいわゆる測定可能なものにフォーカスを当て過ぎていました。体育が学生に与える刺激としての運動・スポーツを行い、その結果体力や健康の維持・増進に繋がってはいるのですが、ここ5年程は、最終的には「こころ」かなという思いが強いです。鈴木守先生も「フィットネス」から「ウェルネス」へとおっしゃっていましたが、私自身もそうでした。Dr. Jackie Goodway もいいコンセプトに基づいてプログラムが実行されても、それをどう「こころ」に結びつけるかが重要だとおっしゃっていましたが、運動の習慣化へは難しい問題があると思いますが、最終的には運動主体である学生が、「こころ」の問題にどう行き着くのか、またそういったものにどうフォーカスを移していくかに、大学体育の一つの目指すべき道があるのではないかと思います。

— 鈴木守先生が、健康志向の体育からかけがえのない身体教育へ、「フィットネス」から「ウェルネス」へと話されておりましたが。

>中村良三先生

「身体」というのは人間だけが持つものです。動物も「身」は持っていますが「身

体」はありません。まさに、人間が人間であるためには「身体」が欠くべからずのものであると、今回改めて認識させられました。ずっと考え続けてきたものではありませんが、改めて立ち返って考えなくてはいけないのかなと感じました。

>川島淳夫先生（秀明大学）

「身体」はどう英訳するのですか。

>日野美里氏（通訳）

心を兼ね備えた「からだ」が大事だと伝えていましたが、「身体」は「body」と訳していました。

> Dr. Zhang Bing

「body and soul」が一番ピッタリはまるような気がします。

— 我々は、常に言葉の定義を気にして選んで使わなくてははいけません。貴重なご意見、ご指摘ありがとうございます。

次に、社会からみた大学教育、あるいは体育についてですが、改めまして、挨拶、礼、マナーなどはスポーツをすることで身につけられるものなのか、緒方先生ご見解をお聞かせください。

>緒方良先生

先程は基本的なことを述べましたが、何をもってビジネスと言っているのかというと、企業はお金を儲けること、具体的には、日々起こる問題を解決することによってお金を儲けています。この問題は二つあり、何もなくても日々生じる問題と先に生じる問題、予見した問題とがありますが、日々の判断でそれらを解決し利益を生んでいます。そこには、運動をしているかいないかも多少関係があると思います。バーバ

ル、ノンバーバルコミュニケーションというものがあります。聞くサイドが聞く姿勢になっているか、話すサイドが話す姿勢になっているかは重要です。例えば、馬鹿な上司が紙に何かを書きながら“これやるとけよ”なんて指示する時もありますが、私は全く聞きません。何故かと言うと、指示を出すのであればちゃんと相手に向けて話すべきだからです。問題解決をしていく上で、ノンバーバルの部分が発動的に出易い習慣をつけている人の方が問題解決しやすいです。フォローアップでき、ビジネススキルがアップしていきます。そのスタンス、姿勢がとれない人は問題解決のチャンスが減ってリスクやミスが増えます。挨拶、礼儀、身のこなし、からだの動かし方を習慣化していくことが問題解決のフォローに繋がります。そういう意味では、それらを運動・体育を通して習慣化しやすいと考えられます。ビジネススキルにも、心、技、体の要素があります。挨拶して礼儀ができていれば仕事ができるというのは大きな間違いではあり、最終的にはスキルが必要ではありますが、フォローアップに関しては体や心が大事なことです。

— 先程の緒方先生の話の中のキーワードの一つとして「コミュニケーション能力」というものがありました。それは、鈴木久雄先生の取り組みの中でも重視されてきました。何故「コミュニケーション能力」を挙げられたか、なぜそこに着目したか、その背景を教えてくださいませんか。

>鈴木久雄先生

我々は「コミュニケーション能力」として6項目挙げていますが、ズバリこれだというのは今までないと思います。しかし、データを示さなければならぬということでした。

一つ、体験をするというのは非常に重要であると思われます。机上の空論ではありませんが、机の上では学べないことが多々あるだろうと思います。さらに、緒方先生の話にも関連しますが、スポーツをやっても指導経験のある者となし者とは、指導力は勿論のこと、コミュニケーション能力にも差が生じます。体育を受動的に受講しているだけではダメで、指導する側に回ってもらうようなチャンスを与えることにより、また違った効果が期待できると思っています。

— 社会に求められている人物像に対して、筑波大学の体育がどうやって応えていけば良いのかも含めて、体育専門学群長であられる阿江先生のご意見をお聞かせください。

>阿江通良先生

昔、体育センターの授業で大多数の学生が嫌で嫌でしょうがなかったであろう陸上運動を宮下先生と担当しましたが、その時、学生が独り立ちして自分のからだを将来にわたって鍛えていける知識ややり方を身につけて欲しいと、基本的な目標を持って行っていました。体育とか運動では、緒方先生がおっしゃっていた「問題解決能力」や「地頭力」、何か起こった時に対処する能力を身に付けたり、それらを身に付けられるようなプロセスを準備することだと思います。大学におけるスポーツや体育としては、「身体」や「動き」という観点から学生にそれらを身につけてもらいたいです。

「スポーツの生活化」というのはスポーツを生活に取り入れることですが、私の恩師の金原（勇）先生は、「生活を体育的にデザインする、体育化してデザインする」ことが目標だとおっしゃっていました。心身の能力を高めることと、色々な場面に対応できる能力を付けることが体育の大きな役

割の一つではないでしょうか。例えば、簡単なことですが今日は疲れたから早く寝よう、というように生活自体を体育的にデザインさせられるように仕向けることです。小さい子であれば動き、学生であれば新たなスポーツ種目、技術に直面した時に自主的に考え学んでいくという態度も含めて生活をデザインできることです。私の父はスポーツを一切やりませんが、元気で私より長生きするのではないかと言われています。スポーツはやらないけれど、生活自体がスポーツ的な要素を担っているのです。作家にはそんなに筋力や持久力は必要ないけれど、自分の生活に合ったように生活を体育的にデザインすることが重要です。そういった学生を送り出していくことが、大学の中で「体育」が永久に生きていけることになるのだと思います。

“スポーツを愛しながらスポーツから脱却する” ことが必要なのかなと、ここが勝負なのかなと思います。体育専門学群はスポーツを一生懸命にやらねばなりません、文武両道の学生を送り出していくことを考えています。緒方先生の言葉、話は非常に心強く、心地よく、それ見よという気持ちを抱きながら聞いていました。

— 中国の事情についてお聞きしたいと思います。清華大学は胡綿濤国家主席も輩出した中国 No.1 の大学、日本で言う東京大学のような大学ですが、多くのスポーツ選手がいる中で、どのような人材、資質を持った学生が社会からみて重要かと思われますか。清華大学ではどうですか。

> Dr. Zhang Bing

ただ知識だけ持っているだけではなく、文武両道を目指した学生を輩出することを目標としています。

— 特に緒方先生から話がありましたが、社会から求められる能力は「問題解決能力」であり、それは動けるからだが前提にあるということです。人が何を考え、それに自分がどう対応したら良いか、そのような解決能力はスポーツだとか人間と人間との関わり合いや結びつきの中から得られるでしょう。岡山大学でも、コミュニケーション能力を身に付けさせることを前提にされているということです。もちろん、そのベースの基礎学力が大事だということも忘れてはならないことでしょう。

3つ目のFD活動についてのテーマに移りますが、まずは鍋倉先生からお願いします。

>鍋倉賢治先生

「つくばマラソン」以外に「ジョグ&ウォーク」のジョギングを担当していますが、学生はジョギングやウォーキングをやりたい訳ではなく、他のスポーツは苦手だけどこれだったら何とかできるかなと消極的な動機が多いです。これが私の原点となっており、何とか元気な学生に教育したい、という思いがあります。持久走という体育のプログラムは、大抵、小・中・高校とずっとやってきているはずなのに、ここまで持久走やマラソンの嫌いな学生が多いのは体育の失敗だと思わざるを得ません。高校までのマラソン、持久走と大学体育でのそれらとは全く違うよってというのが出発点にあります。楽しいから自発的に行える、追込める、限界に挑戦、越えようとするのであり、そこに働きかけたいと思っています。

— 体育センターのFD活動の中心的役割を担っております河村先生、いかがでしょうか。

>河村レイ子先生

教育、授業のやり方や能力を高めるだけではなく、教育、研究活動全般を通して教員に必要な能力の向上を図った活動しております。具体的には、他人の授業を観てアイデアを得るために授業相互研修やその後日の意見交換会、検討会を実施しています。また、学生の評価や授業の風景、様子を題材とした授業改善ミーティングを開催しています。さらに、教育のアセスメント能力を向上させるのもFDの一環とし、事故等の緊急時の対応能力を上げるための訓練やパワーハラスメント、アカデミックハラスメント、セクシャルハラスメントなどに関する講習会を行っております。この前者に関連して、万が一の時のために今年度から大学の予算で保険に加入するようになりましたが、もっと大きな事故が起きた時のために、教員も入っておくべきなのか検討課題です。授業改善のみではなく、もっと大きな大学の全体像を含めてFD活動を行っていく検討が必要と思われれます。

— フロアから大学の取り組みを紹介して頂きたいと思います。

>川上有光先生（国士舘大学）

国士舘大学ではあまり進んでいませんが、今年度より、文科省の通達に則りシラバスの書き方や色々な項目について共通理解を持つように進めています。そこで一つ疑問があるのですが、文科省の通達に則って我々が動こうという体制ですが、それでいいのだろうか、一番は我々が学生に何を伝えるかが大事であるということです。鈴木守先生の“こころとからだの関わり合い”も含めてですが緒方先生の話には考えさせられることが多く、将来どういう学生を育てていくべきかなど、体育や私の専

門である剣道を通して何ができるのか改めて考えてみたいです。

— 鈴木久雄先生、岡山大学ではどうお考えでしょうか。

>鈴木久雄先生

岡山大学でも大体同様なFD活動をしています。ただ一つ課題があります。学生評価アンケートを7、8年前から行い、最近ではそれを教員評価に利用しています。筑波大学の卒業生アンケートの結果のように体育の評価は高いのですが、スポーツ教育センターの副センター長は、“それは当たり前で、体育が楽しくなくてどうするんだ”と言います。体育にとって低いのは致命的で、高くても素晴らしいとしない方がいいと個人的には思っています。

ACSM（アメリカスポーツ医学会）では、スポーツや運動を指導して実践するようになるという人には限界がある、という指針が出されています。CDC（アメリカ疾病対策センター）/ACSMガイドラインで示されているように、身体活動を高める指導の方が重要であり、こちらが体育のもう一つの仕事として我々は現在取り組んでいます。

— 他にフロアから、うちではこんな取り組みをしている、あるいは悩んでいるということがあればお願いします。

>坂東隆男先生（大阪大学）

我々は、来年度から、体育だけでなく教養教育全体で行う新型セミナーという構想があります。学生の自発的な学習意欲を高めることが目的であり、テーマ、内容、成果の全てを学生が計画します。教室に集って教員からレクチャーを受けるのではなく、自分たちの空いてる時間に計画し、活動します。必要に応じ教員から意見を伺いなが

ら最終的にはレポートを出し、それを単位に認定するか検討することになります。例えば、物作りや地域のボランティア参加といったテーマが出てくるのではないかと予想しています。保健体育分野でも単位に認定できるものがあると考えています。岡山大学における取り組みは非常に興味深いです。

>鈴木守先生

FD活動に関してかなりの頻度でシンポジウムやセミナーを開催しますが、集ってくるのはいつも決まって委員の教員のみというのが現状です。まさに、笛吹けども踊らず状態です。現在、各学部からFD委員会を組織していますが、FDセンターを立ち上げなければ上手くいかないだろうとの見通しから、センター設立へ動いております。

大学自体も上からの通達で動いています。予算がつかないと動けないのが現状です。上智大学でも教育イノベーションプログラムにお金をつけて活動しております。体育以外の演劇や芝居から身体を使うプログラムを開発していきたいのですが、知識、ノウハウがありません。そこで、予算をつけて1年間をかけてプログラムを作成するようにしました。

— 今日の議論だけで、大学体育の未来への回答を導き出せるものではないと思います。各々の先生方からご提案頂いたことが各々の大学の事情や環境に応じて実践していくことになるかと思いますが、今日の議論を踏まえ、最後にDr. Jackie Goodwayより意見を聞きたいと思います。

> Dr. Jackie Goodway

大学卒業後、社会人になって東京に出てマンションに住んで非活動的な生活を

送るのではなく、人との関わりを持って、「Active」で「Health」で「Productive」な人間になるために「体育」は必要不可欠でしょう。それはオハイオ州立大学でも既に認められたことです。

— 我々も Dr. Jackie Goodway がおっしゃったことにプラス「身体」というものを再度見直し、鍋倉先生の“自立的に自分を高めていく、共生していく”、緒方先生の“社会人として当たり前のことを当たり前に行う、そのためにはコミュニケーション能力が必要で、動けるからだが

人との関わりの中で「問題解決能力」を育んでいく”、鈴木久雄先生の“「バリアフリー」、施設、人材、お金など様々な面に存在するバリアを取り除いていく”ことが各々必要であり、そうすることにより単に教授するだけではなく、学生自身が自発的に活動し学び成長していけるのだと感じました。

大学体育がこうあるべきだと言うことはできませんが、お忙しい中、パネルディスカッションにご参加して下さいました先生方、ありがとうございました。

これらの「講演概要」の内容については、諸先生方の発表を記録した映像および音声  
を文章に起こしたものです。より分かり易い内容とするために、細かな言葉遣いや語  
句、表現や言い回し、文章構成などについて、一部修正、加筆、削除をさせて頂きま  
した。ただし、内容や意味、意図を歪曲するものではありません。